

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：15501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770035

研究課題名（和文）近代フランス美学の再検討 ドイツ哲学との関係という視点から

研究課題名（英文）Re-examination of the Modern French Aesthetics; in Light of its Relationship to the Modern German Philosophy

研究代表者

村上 龍 (MURAKAMI, Ryu)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：80613885

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：近代フランスの哲学者・美学者たち、より正確には一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて活躍したフランスの哲学者・美学者たちが、カントをはじめとするドイツ近代哲学・美学をどのように受容し、そのうえでいかにして自身の思想を育てたのかを、文献調査をつうじて可能な限り明らかにした。具体的には、シャルル・ルヌーヴィエ、ジュール・ラシュリエ、エミール・ブートルー、オクターヴ・アムラン、アンリ・ベルクソン、ヴィクトール・バッシュ、レオン・ブランシュヴィックにかんする調査をおこなった。

研究成果の概要（英文）：I aimed to pour light on the way how modern French philosophers and aestheticians had formed their own thoughts under strong influence of the modern German philosophy including Kantianism. To be more specific, I examined the cases of Charles Renouvier, Jules Lachelier, Emile Boutroux, Octave-Auguste Hamelin, Henri Bergson, Victor Basch, Leon Brunschvicg.

研究分野：近現代フランス美学

キーワード：近代フランス美学 近代フランス哲学 近代ドイツ哲学 近代ドイツ美学 独仏関係

1. 研究開始当初の背景

(1) さいしょに、本研究の学術的背景について、私のこれまでの研究との関連にてらして述べる。

本研究課題に着手する以前、私は、アンリ・ベルクソン(1859-1941)という近現代フランスを代表する哲学者の、「感性」概念をめぐる美学的な思索の展開にそくして、フランス哲学・美学のドイツ哲学との交流の一面を明るみにだすことに寄与する、そのような研究に、結果的にたずさわることとなった。この研究をすすめるなかで、イマヌエル・カント(1724-1804)をはじめとするドイツ哲学とのあいだでベルクソンがおこなった対話が、志向をおなじくするフランスの思想的環境、わけても、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての時期のそれを、ひろく背景とするものであるらしいことに思いいたった。

とすれば、ベルクソンにかんするこれまでの研究を、近代ドイツ美学をフランスへ導入、紹介したという点では代表的と言ってよからう美学者であるヴィクトール・バッシュ(1863-1944)をはじめとする、ベルクソンと同時代に活躍した哲学者・美学者たちにも応用することができるのではないか。そして、そのようにして、ドイツ哲学・美学をさかんに摂取、血肉化しようとする当該時期の思想的環境を掘りおこすことによって、概して注目のおよぶことがすくない、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての時期のフランス美学の、あらたな側面を浮き彫りにできるのではないか。

私はそのように考え、本研究課題に取り組むこととした。

(2) 次いで、本研究の学術的背景について、国内外の研究動向との関連にてらして述べる。

従来、近代フランス哲学・美学にかんする国内外の研究といえば、複数のフランス人哲学者・美学者が通時的、共時的に共有する思想内容上の傾向に着目して、折衷主義、フランス・スピリチュアリズム、新批判主義、反省哲学、実証主義、等々と名づけられる、さまざまな思想的系譜をたどることが主流であった。そのため、この分野では、視野がフランス国内に留まりがちなきらいがあり、隣国との関係に顧慮しつつなされる歴史研究は手薄であった。

これにたいして、近年、ドイツをはじめとした隣国の哲学者との関係に顧慮しながら、近代フランス哲学の形成されるダイナミズムを解明しようとする研究動向が、いわゆる「哲学の国籍」の問題をもまきこんで、国内外で盛んになりつつある。私の研究目的は、国内外のそうした近年の研究動向に棹さすものでもあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近代フランスの哲学者・美学者たち、より正確には、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて活躍したフランスの哲学者・美学者たちが、カントをはじめとするドイツ近代哲学、美学をどのように受容し、そのうえでいかにして自身の思想を育てたのかを検証し、また相互に比較することにより、当該時期のフランス美学をいわば立体的に把握しなおし、もって従来顧みられることのすくなかった当該時期のフランス美学にあらたな光を投げかけるとともに、いまだ解明されざる部分のおおい近代哲学・美学上の独仏関係の一端を明らかにすることであった。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、以下に述べるような文献調査の方法をもってすすめられた。すなわち、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて活躍したフランスの哲学者・美学者たちの著作のテキスト内在的な分析をつうじ、まずは彼らの術語体系を把握したうえで、講義の記録等の二次的資料なども積極的に活用して、ドイツ哲学・美学への言及を丹念にひろいながら、彼らの解釈するかぎりでのドイツ哲学、美学が彼ら自身の術語体系の編成、再編成におよぼした影響を見さだめるとともに、そのありようを相互に比較検討する、という方法である。

調査の対象となった哲学者・美学者は、以下に挙げるとおりである。すなわち、シャルル・ルヌーヴィエ(1815-1903)、ジュール・ラシュリエ(1832-1918)、エミール・ブートルー(1845-1921)、オクターヴ・アムラン(1856-1907)、ベルクソン、バッシュ、レオン・ブランシュヴィック(1869-1944)、といった面々である。

調査の手順としては、二五年度にはバッシュにかんする調査を集中的にすすめ、二六年度にはこれと並行して、以前にえた研究成果を活かしやすい部分の調査を、より具体的には、ベルクソンが著作や二次的資料のなかでしばしば、それもおおくの場合、カントをはじめとしたドイツ近代哲学へのとり組みのありようにかんして言及しているラシュリエやブートルー、それから、ベルクソンの思想を直接的に批判したアムラン、およびベルクソンにかんする調査をすすめ、二七年度にはこのこりの部分の調査をおこない、二八年度には以上の調査結果を総合した。

(2) なお、上で名前を挙げた面々と直接的、間接的なむすびつきのあった同時代の哲学者・美学者による、近代ドイツ哲学・美学の解釈にも目を配ることが、調査の過程ではたいへん有益であった。たとえば、フランスにおいて本格的なフィヒテ研究のさきがけをなした哲学史家グザヴィエ・レオン(1868-1935)の一連の著作などは、重要な参照元となった。

(3) また、関連する先行研究からも、調査の過程で多くを学んだ。たとえば、1920年代において早くもカント哲学のフランスへの流入について考察した、マクシミリアン・ヴァロワの貴重な仕事のほか、個々の哲学者・美学者にかんする近年のいくつかの研究は、本研究にとって有力な補助線となった。

(4) さらに、その他同時代のフランス人美学者やドイツにおける新カント派などにも、可能なかぎり目を配ることが、本研究にさらなる奥行きをもたらしてくれた。

4. 研究成果

(1) 関連資料の収集、調査は、四年間の調査期間中に、途中パリへの主張などもはさみつつ、おおむね当初の予定どおりすすめることができた。

その結果、従来、隣国との関係に顧慮しつなされる歴史研究が手薄であった、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての時期のフランス美学にあらたな光を投げかけるとともに、いまだ解明されざる部分のおおい近代哲学・美学上の独仏関係の一端を明らかにすることに、一定の貢献ができたものと考えられる。

(2) のみならず、ベルクソンとモーリス・メルロ＝ポンティ(1908-1961)とのあいだの、従来は見落とされてきた、「歴史」概念をめぐる思索のうえでの影響関係などについても併せて調査するなど、当該時期のフランスの思想的環境を幅ひろく検討し得たという点では、当初の見込みを上回る成果がえられたと言える。

(3) 研究成果の公表にかんしても、とりわけ、ラシュリエやベルクソンにかんする調査の結果については、雑誌論文、ならびに、国内外の学会での発表をつうじて、まとまった成果を発表することができた(この点については、「5. 主な発表論文等」欄を参照されたい)。

また、研究機関中には成果を公表できなかった部分についても、雑誌論文や学会発表をつうじて順次、調査結果を公にしてゆく予定である。

(4) なお、本研究課題において調査の対象となったフランス人美学者、哲学者たちが活躍したのは、いうまでもなく、独仏関係が政治的、社会的にきわめてデリケートだった時期でもある。そこで、今後の展望としては、本研究課題をつうじ得られた成果をふまえたうえで、政治的・社会的な問題との交差にも配慮しつつ、ひきつづき近代哲学・美学上の独仏関係を注視する方向で研究を継続、発展させてゆくことが、望ましかろうと考えられる。

とすれば本研究課題は、一定時期の哲学、美学上の独仏関係にそくして、美と政治との関係という普遍的な問題を考察する、そのようにいっそう原理的な研究へと発展しゆく可能性をひめているといえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

村上龍「ジュール・ラシュリエの「ポスト・カンティスム」——一九世紀フランスにおける近代ドイツ哲学受容の一断面——」、山口大学哲学研究会編・山口大学人文学部発行『山口大学哲学研究』、24巻、2017年、1-21頁。
【査読無】

Ryu MURAKAMI, A Study of the Bergsonian Notion of <Sensibility>, 山口大学哲学研究会編・山口大学人文学部発行『山口大学哲学研究』、23巻、2016年、21-28頁。
【査読無】

村上龍、「呼びかけ」と「応答」としての「歴史」 「歴史」概念をめぐるベルクソンとメルロ＝ポンティとの交差」、西日本哲学会編発行『西日本哲学年報』、22号、2014年、37-51頁。【査読有】

〔学会発表〕(計 2件)

村上龍「呼びかけ」と「応答」としての「歴史」 「歴史」概念をめぐるベルクソンとメルロ＝ポンティとの交差」、西日本哲学会第64回大会、2013年11月30日、於九州産業大学(福岡県福岡市)。

Ryu MURAKAMI, A Study of the

Bergsonian Notion of <Sensibility>, 第 19
回国際美学会議、2013 年 7 月 26 日、於ヤギ
エウォ大学 (クラクフ、ポーランド)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上 龍 (MURAKAMI, Ryu)
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：80613885

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()